

女囚双虐

箱入目掛と極道生娘



濠門長恭

登場人物

チツ

悪徳目明し（この藩では同心手先という）のひとり娘。母とは死別。新茶の年頃だが、父親を真似て日頃から小悪事を繰り返し、周囲から疎まれている。

雪江

町民の出。元の名はユキ。六年前に御祐筆（奉行と同格）の嗣子と恋愛に陥り、武家娘として嫁入するために笹原家の養女となる。しかし婚儀の直前に劉安して破談となり、笹原家の養女のまま寮住まいの行かず後家。実際には勘解由の目掛。

笹原勘解由

奉行所の綱紀肅正に本気で努めているが、清濁合わせ飲む性格。嗜虐癖あり。

富島兵衛

同心加役。勘解由の懐刀、汚れ役。半年前に、チツを手なづけようとして肘鉄を食らわされた。清濁の「濁」が勘解由よりも強い、嗜虐癖あり。

源太

富島直属の同心手先。チツの父親。ゲジ源（ゲジゲジ源太）と呼ばれて忌み嫌われている。悪行が過ぎで摘発されかかる。入牢すれば牢内仕置で殺される

のは必定。チヅを見捨てて（むしろ富島の囲われ者になることを願って）逐電。

太田佑光

牢役人。牢内不正（主として女犯）役人の首領格。

柴沼平一郎

牢役人。太田の乾分。精力絶倫。

関取タマヨ

女相撲で相手を殺して、鉦山送りになるところ、太田に見込まれて牢名主を続けている。

ナミ

産婆。間引きに加担した咎で入牢。女牢に産婆がいれば便利なので、旧悪を白状させるといふ名目で長期間留め置かれている。

サキ

タマヨの愛人。奉公先の主人の娘と淫らな関係に耽って、主人に訴えられた。百敵のかわりに百日の入牢。タマヨの愛人の座をめぐる喧嘩で五十日の日延べ。

目次

登場人物	二
吟味法度（女囚取扱より抜粋）	五
一 入牢志願	六
二 女囚色責	二九
三 全裸捕縛	七二
四 牢内仕置	一〇二
五 三所凌辱	一二九
六 十一八一	一六一
七 連虐無惨	一八七
八 双女相愛	二二一
後書き	二三一

吟味法度（女囚取扱より抜粋）

女囚ノ吟味ニ際シテハ何事ニ付見苦シキ事無キ様

六尺禪ヲ着用セシムルベシ

緊禪ハ女房ニ行ハセルベシ

役人ハ女囚ノ肌ニ触ルルベカラズ

陰毛が見エタル時ハ禪ヲ締直ベシ

一 入牢志願

障子の向こうに人影が差した。

「旦那様がお見えです」

下男の茂助だった。

「それで……お出迎えは不要とのことでした。あつしはちよいと用足しに行つて参りますので」

今日は二十七日。いつも通りだ。

雪江は箆笥から浴衣を取り出し、手早く素裸になつて身にまとつた。春の半ばに浴衣とは季節はずれもいいところだが、ここ数年は春秋を問わず、これが養父を出迎えないときの作法になっている。

雪江は用もないのに台所に立つた。落ち着き払つた所作とは裏腹に、すでに心の臓は早鐘を打ち、腰の奥が疼いている。

ドカドカと廊下を踏み鳴らして近づく足音。せいぜい顔を引き締めて、雪江は闖入者に

正対した。

卵の形をした顔に太い眉と大作りな口元。武張った美男子だと、見るたびに思う。が、今は見惚れている暇はない。

「女、神妙にいたせ」

男——笹原勘解由は雪江を軽く突き飛ばした。

「あれ……」

心得たもので、雪江はやわらかく転んだ。

「なにをなさいます」

右腕を背中にねじあげられて、雪江は本気で相手を振りほどこうとした。が、男の力にかなうものではない。

「おとなしくせい。逆らえば痛い目にあうぞ」

「ご無体な。おやめください」

争ううちに片肌が脱げる。

「あばれるなと申しておる」

勘解由はもう一方の腕も袖から引き抜いて、雪江の両手首をまとめて縛った。縄尻を首に回して手首を吊り上げる。ほんのひと呼吸か

ふた呼吸のうちに、雪江は後ろ手に緊縛されてしまった。捕縄術でいうところの早縄である。肩が痛くても、手を下ろそうとすると自分で自分の首を絞めることになる。

「女、立て」

手首をつかまれて、雪江はふらっと立ち上がった。もう、芝居がかった抗いは捨てている。目がとろんと煙って、切なそうに息を漏らしている。

勘解由が懐から凧糸を取り出した。雪江の豊かに張った乳房の先で硬くしこっている双つの乳首に両端を結んで、糸の中ほどを引っ張る。

「歩け」

ぴいんと糸が張っても、雪江は動かない。

「くうう……痛い」

呻きながら、痛みを存分に味わっている。

チツと、勘解由がわざとらしく舌打ちする。

「おまえのような阿婆擦れには、これくらいでは物足りぬようだな」

雪江の帯を解くと、浴衣が身体から滑り落ちる。

縄のほかは一糸まとわぬ姿となった雪江の正面に、勘解由が片膝を突いた。目の前には無毛の股間。寮に独り住まいをさせているので、悪い虫が付かぬようにという口実で、剃らせているのだ。

しかし、腋の毛は普通に生やしている。現代の感覚からすればアンバランスだろうが、この時代はある種の女に限っては、これが珍しくない。

勘解由はもう一本の尻糸を手にした。それを、すでに膨れて顔を覗かせている実核のくびれたところに、乳首以上の強さで巻きつけた。

乳首をつなぐ糸に絡めて、ぐいと引っ張る。

「ああっ………！」

ついに悲鳴をあげて、雪江は前へよろめいた。

ようやく七ツ（午後四時頃）を過ぎたばかり。

り。明るい中を素裸に縄を掛けられ、女の急所ばかりを糸で縊られて、雪江は居間へ引つ立てられた。

勘解由はいったん座敷へ行つて、腰の大小を刀掛けに起き、十手も並べた。羽織を脱いで、着流し姿で居間へ戻る。

「そこへ直れ」

勘解由の厳しく作つた声に、雪江が崩折れるように正座する。

髪飾りを抜き取られ、髪を一つ結びにされた。乳首と実核の尻糸も取り去られて、雪江はちよつとだけ小鼻を膨らせた。

元々が丸っこい顔立ちでおちよぼ口なので、そうするとますます愛嬌が表に出て、切れ上がった目尻のきつさが消えてしまう。

「囚人は本縄を掛けるのが定法」

勘解由がひとりごちて、雪江の首に巻いた縄をほどいた。その縄で乳房の上を縛つて手首の縄に留めた。

自分しか持っていない鍵で雪江が使つてい

る箆笥のいちばん上を開けて、幾つもの縄束を取り出した。そのひとつで乳房の下を巻き、縄尻を肩越しに前へまわして、下乳の縄をくぐらせ「く」の字に絞った。

「あ……はああ」

雪江が陶然と息を吐いた。

勘解由に初めて縛られたのは四年前。上役にま、い、な、い、を贈るかわりにと、夜伽を命じられて。さすがに峻拒した雪江だったが、縛られて猿轡まで嚙まされ夜具の上に転がされたのでは、抗いようもなかった。

上役が満足して返った後、雪江は緊縛されたまま勘解由にも抱かれ、そのとき初めて、肉蕾ではなく肉壺の悦びを知ったのだった。

それ以来、ふたりの閨には縄が欠かせぬものとなった。

「おのれで捕縛することはないが、配下の者に手本を示すこともあるからな」

勘解由は町奉行だった。すでにひと通りの捕縄術は心得ていたが、雪江を稽古台にして

腕に磨きを掛け、あげくは囚人には法度の淫ら縄まで覚える始末だった。

勘解由はさらに縄を足して、豊満な雪江の乳房を西瓜のように丸く縊り出した。

膝を割って胡坐を組まされて、雪江の全身が桃色に染まった。足首も縛られ、前に身体を倒して首とつながれて、肌の色がいつそう濃くなる。

「なにを……なさるのでしよう」

抗議ではなく、羞じらいと期待の緋い交ざった声だった。

「こうするのだ」

勘解由が雪江の肩を支えながら前へ倒す。

雪江は両膝と顔で身体を支える形にされた。

「こんな……ご無体な」

言葉と声音が合っていない。

「ううむ。女淫ほとがぱっくりと割れて、奥の奥まで見通せるぞ。おっと……」

勘解由が懐から懐紙を抜き出して畳の上に敷いた。それほどに「ぱっくりと割れ」た部

分は濡れそぼっていた。

「これを称して座禪転がしという」

勘解由が立ち上がって、衣服を脱ぎながら雪江に教える。

「こうすれば、女子おなこは抗えぬ。前も後ろも御開帳で廻られ放題というわけだ」

勘解由は懐紙を小さく千切って口に入れ、唾で湿しながら嚙んで丸めた。それを指で女淫に押し込んで、子袋に通じる穴をふさいだ。いつものことだが、今日は丸見えなので手間がかからない。

もつとも。現代の目で見ると、この処置は気休めでしかない。それでも、これまで雪江が妊娠しなかったのは――月の運行に合わせた太陰暦の三日から五日にかけて、月の障りが始まるからだだった。つまり、二十七日はいわゆる安全日なのだ。

閑話休題。

勘解由は立って、鍵付の抽斗から張形を取り出した。ちなみに、勘解由は養女に独り遊

びを禁じてはいない。その気になれば胡瓜も人參もある。そういう意味では、下の毛を剃らせたところで万全ではないのだし——上役への人身御供に差し出すくらいだから、あくまでも「形」に過ぎない。

張形は大きさの異なる物が幾つもある。そのうち比較的比較的に小ぶりの、といっても太さが一寸二分（約三・六センチ）はある代物を、勘解由は無造作に女淫に突き立てた。

「ああ……んん」

喘ぎ声は、むしろ不満そうだったが。じゅうぶんに滑ぬめらせたそれを菊座にあてがわれると、大きく息を吸ってからゆっくりと吐き出していった。

しかし勘解由も、そうそう雪江を甘やかすはしない。息を吐き切って吸い込もうとする瞬間を狙って。

ずぐうつと、ひと息に奥まで貫いた。

「かはっ……」

雪江が息を詰まらせた。

「い、痛いです……」

甘えた声は「気持ちいいです」としか勘解由に聞こえない。

「ふふ、これからだ」

勘解由がつぎに手にしたのは、太さが二寸（約六センチ）にちかい大業物だった。こちらは男根を模してあるから、雁首のところでは優に二寸を超えている。

それを、今度はじわじわと女淫に埋め込んでいって、雁首が隠れると、ついつと引き抜く。

「あああ……ひゃあん」

雪江の、初めてのの本気の声だった。

勘解由は、また浅く突いては引き抜き、それを律義に九回まで続けてから、槍を突くように迅く、根元まで貫き通した。

「あああああつ……」

女悦の悲鳴が余韻を引く。

勘解由は九浅一深を繰り返しながら、さまざまに角度を変えて、勝手知ったる穴の中の

とくに敏感なところを突き、こねくつて、雪江を追い詰めていった。

「ち、父上……雪江は、もう……もう」

こういった場で雪江が勘解由を父と呼ぶのは、符丁になっている。縛られ、あるいは敲かれて、それに耐えられなくなったときに使うのだが、今は抜き身の催促だった。

「堪え性こらえしやうのない娘になったものだ」

「そ、そのようになさったのは……父上です」
「ふん」

勘解由は禪をほどいた。さすがに大業物には負けるが、菊座を貫く張形よりはずんと立派な逸物が天を衝いている。大業物を抜き去って、逸物をそこへ突き挿れる。

「なるほどたしかに——肌に触れずとも出来る。しかし、雪江は囚人ではないから、これも構わぬな」

勘解由は菊座を貫く張形を半ば引き出して左手に握り、おのれの下腹部に握り拳を押しつけた。

「覚悟は良いな」

勘解由が抽挿を始めると、菊座の張形も一緒に動きだした。

「ああっ……あっ、あっ……す、凄いい！」

雪江が感極まった声を迸らせた。

これまでにも、一方を張形に貫かれてもう一方で抜き身を受け挿れたことは何度も、いや何十度もあった。しかし、同時に動かされたのは、これが初めてだった。

女の身体が安定しているから、男は支えてやったり折り曲げたりする必要がない。左手で張形を握っても、まだ右手が余っている。

勘解由は右手を横合いから雪江の下腹部に差し入れて、淫核をくじった。皮をつまんで実核を出し入れさせ、あるいは左右にひねる。

「いやああああああ！」

雪江の悲鳴が、ひとときわたく甲高くなった——のは、わずかな間だけ。

「うがはあっ……い、いぎまず！」

だみ声にちかくなつて。

「ごわはあああつ……!!」

吠えると同時に、縛られて自由の利かない身体が許すかぎり、背中を反り返らせて、がくがくと全身を震わせた。淫門が激しく痙攣して勘解由を締めつける。

「うおっ」

勘解由も短く吠えて、女淫の奥へ精を解き放った。

雪江は幸せそうにぐったりしているが、勘解由は忙しい。手早くおのれの始末をつける、嫌悪の色も見せず雪江を拭ってやり、子袋の穴の詰め物を子種もろともに掻き出す。

井戸へ行って手桶に水を汲んで、洗濯盥たらいと、これはさり気なく井戸の屋根に隠してある水鉄砲を持って居間へ戻る。盥を座禅に汲ませた脚の間に突っ込んで。水鉄砲で奥まで洗ってやった。

そうして、雪江は緊縛して転がしたままにしておいて、おのれだけ身支度を調えた。もちろん、これで矛を収めるつもりなどない。

まだ夜にもなっていないし、勘解由は男盛りの四十五歳。とはいえ、雪江に人心地がついたら夕餉の支度をさせねばならない。

勘解由は縁側に座って煙草に火をつけた。

「これだけ用心をしても、孕むときは孕む」

橙色に染まった雲を見上げながらつぶやく。ひとり言にしては、すこしばかり声大きい。

「儂はかまわぬが——きやつらは困るに決まっておる。よほどに悪運が強いのか。いっそ、ひとりでも身籠ってくれば、詮議のしようもあるものを……」

「お役目のことでしょうか？」

快感の余韻から半ば醒めて、雪江が訊ねた。

「うむ。今日の座禅転がしな——あれが牢内で女囚相手に行なわれておるといふ噂がある」

「まあ……」

雪江が絶句した。捕物とか詮議などのあれこれを、雪江はふつうの堅気女よりは詳しく知っている。罪科が明白なのに自白をせぬ者は、男女を問わず厳しい牢問ろうもんに掛けられる。

しかし、女だからといって恥辱を与えられることはない。ありていに言つて、女は甘やかされているとさえ、雪江は思う。

責め問せめといで着衣が乱れて、万が一にも羞せまずかしい所が人目に晒されでもしようものなら、責め問に立ち会つた同心が謹慎をおおせつかるほどだ。だから、御府内は知らず、この国では女囚に禪を着けさせるのだと、これも寝物語に聞いたことがある。

それなのに、あのような羞せまずかしい姿にして操を穢すなど、その役人は切腹でも追いつかない。

勘解由が居間に戻つて、雪江の縄をほどきにかかった。

「父上は、そのような狼藉を断罪なさらないのですか？」

「牢奉行に調べさせてはおるが、吟味の場に踏み込むわけにもいかぬしなあ」

現在の世でも組織の硬直化が問題にされているが、面子を重んじる武士の世界では、そ

れがはなはだしい。牢奉行が配下の牢与力の頭越しに吟味の場に容喙すれば、牢与力の面子を潰すことになる。まして、勘解由は牢奉行の上に立つ町奉行であつてみれば、直々に動くなど考えられない。

「もしも女囚が孕みでもしてくれたら、牢奉行どころか、儂自身がしゃしゃり出る余地もあるのだが」

「誰も訴えないのですか？」

「儂も、それが不思議なのだが。ここ数年、若い女が牢死、その実は口封じだが。そういう事実も無い。となると……訴え出るに出来ない女だけが毒牙に掛けられているのかもしれん」

「死罪になるような？」

「それは無い」

それまでもどかしそうな物言いから一転して、勘解由は断じた。

「死ぬとわかれば怖いものなどなくなる。どうせなら役人を道連れにと考えるだろうな」

「では……？」

「すぐ解き放ちになるような者も駄目だ。儂が手をつける——の、で、は、な、く、腰を突き出すとしたら、山送りか廓送りになる女だ」

勘解由が持つて回った言い方をしたのには仔細がある。吟味法度では、役人は女囚の肌に触れてはならない。しかし「触れる」とは——「手で」という前提が暗黙裡にあつた。

「足で触れる」とは言わぬではないか。だから。ただ腰を突き出すだけならば、腰の先で魔羅が怒張していようと、それが女囚のどの部分に嵌まり込もうと「触れる」ことにはならない——という屁理屈が罷り通る余地があるのだった。と、それを雪江にわからせてから。勘解由は、自分ならばどのような女囚に向かつて腰を突き出すかをあらためて論じた。

牢からは出られても、死ぬまで娑婆には戻れない。牢内での出来事を訴えても、自分が睨まれることはあれど得することはなにも無い。そういう女囚を選ぶ。女囚が訴え出ぬか

らには「なにも起きていない」ということになつてしまう。

「では、父上の力をもつてしても、どうにもならないのですか」

勘解由の表情が、ふっと動いた。

「ひとつだけ、手が無いこともない。儂が横紙を破つて牢に踏み込んだとき、女囚の、それもできるだけ身元の確かな者が名乗り出てくれれば……」

雪江は、養父の視線がまつすぐに自分を捉え、それからすいと流れるのを感じた。

そんな都合の良い女囚が、たまたま牢内にいるとは限らない。ならば、誰かが非常の覚悟を固めて牢に送り込まれるしかない。男に（おそらく何人にも）犯されても自害などせず、それだけでなく厳しい牢間にも耐えて、身元がしっかりした女。

そうだったのか——と、雪江は養父の真意を悟った。

今こそ恩返しするときだと、雪江は迷うこと

なく決心した。雪江だけでなく、父母も勘解由には大恩を受けている。

貧乏な煮売屋の娘であるユキが武家、それも御祐筆である本田家の嗣子と恋に落ちたのは七年前、●五歳のときだった。まさか婚姻が許されるはずもないのだが、じきに雪江の妊娠が判明した。困^{こま}じ果てた本田が、庶民の暮らしに明るい笹原勘解由に墮胎医の斡旋を頼み込んで、逆に説得されて（なにがしかの恫喝もあったと、雪江は見抜いている）、婚儀が決まった。

こういう身分違いの場合は、娘がしかるべき武家の養女となって武家の作法も習い、その家から嫁ぐ形をとる。それも、御祐筆と同格である笹原家が引き受けてくれた。

そしてこれは本田家の見栄であったが、もしも嫁の出自が露見したとき、いくらなんでも親が屋台曳きでは体裁が悪い。小奇麗な店くらいは持てと、それなりの支度金まで渡されて、ユキの両親は驚くやら感激するやら。

しかし、人間万事塞翁が馬。ユキあらため雪江は、婚儀の直前に流産してしまった。当然のごとく破談となって。しかも、支度金を返せという無体な追いつちがきた。そんなものは、居抜きのお店を買って模様替えもして、とつくに無くなっている。

これを肩代わりしてくれたのも、養父となつた勘解由だった。

世間の目もあることと、御城下の外れに小さな寮を買って、勘解由は雪江を匿ってくれた。そこに深謀遠慮があるのに気づかないほど雪江は馬鹿ではない。赤子の喪に服して四十九日が明けたその日に、雪江は喜んで勘解由の目掛となつたのだ。

もちろん。それしきのことで大恩を返せたとは、雪江自身が思つてもいない。

だから。初めて人身御供にされたときも。

あとひと押しされていけば、縛られなくとも首を縦に振っていただろう。そのお蔭で、二度と戻れない禁断の悦楽園に踏み入ってしまった

った——ことに感謝はしても、恨みなど無いのだが。

他人の目から見れば、勘解由が女を権柄なく金づくで弄んで、変態じみた真似まで強いているように映るかもしれない。しかし、雪江はみずからの意志で勘解由の下心に応えたのだ。そこが、女囚と悪役人との関係とは絶対的に違っている。

罪を犯した女であっても、悪役人の淫らな欲望の犠牲にされて良いはずがない。こういった連中には天罰が下ってしかるべきだ。天罰が下らないのなら、しかるべき人が罰を与えなければならぬ。

自分が入牢して、悪徳役人の餌食になって、そして証人として名乗り出れば。町奉行笹原勘解由の養女の言い分を、牢奉行といえど握り潰すわけにはいくまい。

という義憤と義理だけではなく。禪一本の裸に剥かれて鞭打たれ、石を抱かされている自分の姿を想像して——戦慄しながらも腰の

奥を熱く痺れさせてもいた。

勘解由には、縛られて女の急所を罫られるだけではない。戯れに尻を折れ弓で敲かれたり、乳房を平手で叩かれたり握り潰されたり。そんなとき、雪江は本心から厭がり、痛みに耐えかね——けれど、これも御恩返しなのだからと、隣近所に声を聞かれまいと悲鳴さえ押し殺して耐えてきたつもりだった。耐えながら、女淫ほとは心を裏切って熱く滾っていたのだけだ。

それに気づいてしまうと。縛られて媾合つて、初めての女悦に達したくらいだから、自分には甚振られることを悦ぶ心が隠れているのではないかと——疑うときもあつたのだ。

そうなってくると。どのように甚振られているときでも、『父上』と呼び掛ければ、それで終わってしまうという——それが、物足りなく思えてくる。けれど、聞く耳を持たないでくださいとおねだりするのはいくらなんでも浅ましすぎる。

濡れ衣を白状するまで、とことん責め苛まれるというのは……

「父上」

雪江は素裸のまま居住まいを正して、畳に手をついた。

「そのお役目、是非にもわたくしに勤めさせてください」

二 女囚色責

街道からはなれた町はずれの一面にぼつんと一軒の小料理屋があつた。『豆腐と酒』と書いた看板を掲げて暖簾に『豆屋』と書いているだけで、申しわけほどに並べた縁台には客が一人もいないという、居酒屋ともいえない有様だが、二階建てで四畳半ばかりの座敷を三つも設けてあるのが不釣り合いだった。

その二階座敷。

「お待ちせしました」

若い女が膳を運んできて、たったひとりの客の前に置いた。赤い前掛けをはずすと客の隣に横座りになって、徳利を差し出す。

「おひとつ、どうぞ」

四十絡みの客が盃を受けて、性急に呑みますと女の尻に手をまわした。

「早いのは厭ですよ」

意味深な言い方で、女はやんわりと男の手

をはずした。

「すこしは、うちの自慢の荒金豆腐も召し上がってくださいな」

そのくせ、箸に手を伸ばす暇いしまも与えず徳利を傾ける。

「俺は豆腐になる前の豆のほうが喰いたい」

男が三杯目を干して、左手で女の肩を抱き寄せ、右手で着物の裾を割る。

「やですよ。あたしのはせいぜい小豆ですからね」

股間をまさぐられても、女は平然としている。賄賂がわりの人身御供にされたこともある雪江が、これしきの悪戯で動じるはずもなかった。

「そういや、まだ名前を聞いてなかったかな」

男は肩を抱いていた左手を襟元に差し込む。

「ユキといいます」

なまじ偽名など使うと素人はしくじりやすい。本名はユキ。武家屋敷で奉公していたときには雪江と呼ばれていた。十のうち九まで

は眞実まことだった。

「ああん。いま、お床を延べますから」

ユキは口移しで、男に盃三杯分よりも多い酒を飲ませてから立ち上がった。座敷の奥に畳である布団を、ゆつくりとした動きで敷いて。

「こちらへどうぞ」

早くも酔ったのか、男がふらふらと立って着物を脱ぐ。雪江は布団の横に座ったきり、帯をほどく様子もない。

「妙だな。やけに眠い。この店は、女は飛びきりだが酒はひどいな」

男は布団に倒れ込むように寝転がって、鼾を掻き始めた。

「もし、おまえ様……ねえ？」

ユキは男の肩を掻すって、深く眠っていることを確かめた。一合に満たない安酒で、こんなに早く泥酔するはずもない。酒に眠り薬が混ぜてあったのだ。芥子の実と曼茶羅華の根から作られた御禁制の品も、町奉行が裏か

ら手をまわせば、なんともなる。

ユキは男が床の間に無造作に置いた財布を取り上げた。三両二分。この店の相場を考えると過分な金額だが、十両に満たなければ首は飛ばないのだから、安心して盗める。

ユキは押入れの奥から風呂敷包みを取り出した。中身は、一端に鉤爪を付けた縄梯子と草履。鉤爪を窓の敷居に引つ掛けて外へ垂らした。

二階へ上がる妓は、この店の常雇いではない。金に困った娘や人妻が、ほんの半日くらい「手伝い」に来ているだけ。土壇場で怖気づいたり、ユキのような悪心を起こしたりしても、階段の下には若い衆が居座っているから、逃げられない仕組みになっている。まさか乱破の真似事をしてのけようという女が現われるとは、夢にも思っていない。

何度も練習はしたものの、やはり恐る恐るといった態で、ユキは縄梯子を下りた。その足が地面に着くか着かないうちに。

「こんな所で軽業の稽古かい？」

いきなり声を掛けられて、ぎくつと身体を強張らせたのが、ユキにできる精いっぱい芝居だった。

ユキは男から盗んだ財布を、わざと懐から覗かせていた。ひと目で男物と知れる。手先（御府内でいう岡っ引き）が縄梯子を上って、裸で眠りこけている男を見つけたので、枕探しと断じられた。

ユキはその場で縄を打たれて番屋へしよつ引かれた。

現場を押さえられたのだから、シラを切るはずもない。素直に罪を認めて牢屋送りとなった。

牢屋へ送られた科人とがにんは素裸にされて持ち物と身体の両方を調べられる。女人の場合は、牢役人立ち会いの下で脱衣婆だつえばと呼ばれる女が実務にあたる。だから、この場にはユキを捕らえた同心の姿は無い。

勘解由から牢でのあれこれを聞いているユキだったが、見知らぬ者たちに素裸を晒すばかりか穴の奥まで調べられる不安と羞ずかしさと、物々しい雰囲気に気圧されて、どうしても怯えてしまう。とはいえ、予備知識のない堅気の娘なら、全身を震わせて泣きじゃくるのが相場だから——それなりに場数を踏んだ悪党のように、ユキは見られていた。

「おやまあ……」

腰巻を剥ぎ取った脱衣婆が、感心したような馬鹿にしたような声をあげた。

「へええ……かわらけ……じゃあないね。剃り跡が残ってる」

ユキの股間を覗き込み、指先で下腹部を撫でて。

「根っからの商売妓だね」

そう断じた。岡場所ならともかく、れっきとした遊郭の妓なら下の毛は色々と手入れをするのが慣わしだった。小さな逆三角形に切りそろえたり、天辺にちよこんと残してあと

は無毛にしたり。ユキのようにすっかり綺麗さっぱりにする者も珍しくはない。脱衣婆は、そのことを言っているのだ。

ユキは弁解しない。商売妓が下の毛を手入れするということを、堅気の女は知らないはずだから、否定すればかえってややこしくなる。

「ほええ……」

ユキの着物をあらためていた脱衣婆が嘆息した。

ユキの帯には一分銀が十六枚も縫い込まれている。四枚で一両。十両あれば一家五人が一年は暮らせるというから、四両は庶民にとつて手の届く大金といえる。

脱衣婆は十六枚をすべて帯から剥ぎ取って、十二枚を油紙にくるんだ。四枚は自分の懐へ。もつとも、後で立ち会い役人に半分を渡して残りを二人で山分けするのだが。

それから、口を開けさせて中を調べ、四つん這いにさせて竹篋で前と後ろの穴を調べて。

「なにも隠しておりません」

牢役人に告げてから、油紙にくるんだ一分銀を女淫に押し込んだ。牢役人は、わざとらしくそっぽを向いている。

「しつかり締めて、落とすんじゃないよ」

脱衣婆がユキの耳元にささやいた。

「おまえさんの着物は、これがいいかね」

真新しい鼠色の囚衣がユキに与えられた。

それを身に着けて。髪は勘解由に緊縛されるときと同じように、根元を括って後ろへ垂らして。最後に縄を掛けられた。

早縄と違って手間暇のかかる縛り方だったが、首縄と腰に巻いた縄と二の腕の四か所を頂点とした大きな菱形を形作られただけで、乳房への圧迫はそれほどでもない。心を預けた男に縛られているわけでもないのです、ユキはまったく醒めていた。

「広小路南、煮売屋『笹雪』の娘、ユキ。入牢申し付くるものなり」

型通りの口上とともに、ユキは牢へ入れら

れた。

牢名主に睨まれてはかなわないので、さっそくにその場で板の間に平伏する。

「ふん、慣れたもんだね。御牢は何回目だい？」
しくじったと思つたが、ちゃんと逃げ道は付けてある。

「御牢へ入れられるなんて、これが初めてです。ただ……そういうお兄さんやお姐さんとお付き合ひしたこともありますから」

「いろいろと入れ知恵されたってかい？」

「はい……失礼します」

ユキは身体を起こして腰を浮かした。

全裸で縛られて脚を閉じられないよう箒の柄に足首を縛られた姿を見知らぬ男に眺められるよりも、ずっと羞ずかしかつたが。ユキは囚衣の裾を割って指を女淫に挿れ、油紙の包みを取り出した。

それに両手を添えて、前へ差し出す。

「これを蔓つると言うことも教わりました」

このとき初めて、ユキは牢名主の顔を見上

げた。三十貫ちかく（約百キログラム）はありそうな筋肉に鎧われた巨軀の上に、大福餅に小さな目鼻を筆で描いたような顔が乗っている。囚衣が紺色なのは、男物なのかもしれない。

「ひゃあ。三両とは豪儀だねえ」

牢名主の横に控えていた三十絡みの女が油紙を開いて素っ頓狂に叫び、あわてて片手で口を押さえた。

男に比べて女は、出来心や間違いで罪を犯してしまった素人が多い。蔓を持ち込むなど知らず、後で慌てて親族に差し入れてもらったりする。

牢内での待遇も牢仲間からの好意も、蔓の多寡で決まる。とはいえ、額が大きすぎてもあれこれ詮索される。牢役人の耳にはいれば余罪を追及される。その兼ね合いで（脱衣婆に掠め取られるのも計算して）四両と決めたのは、ユキを捕らえた同心——実は笹原勘解由の裏向きを務める富島兵衛だった。

富島は小料理屋が岡場所になつていとう噂を聞きつけて張り込んでいた——というもの、ぎりぎりの真実だった。そこに鴨が葱を背負つて飛び込んできたというわけだ。

ユキは盗みの罪だけでなく、売り女としても取り調べられ、小料理屋の仕組など追及されるだろう。素直にすべてを白状すれば百敵きの替わりの百日牢ですむかもしれないが、牢問に掛けられるまで強情を張れば、廓送りは免れない。勘解由はそこまで計算して、筋書きを組んでいる。

小料理屋を誰から紹介されたとかいった、隠しておかねばならないことに気をつけながら、ユキは自分の罪状を牢名主に申し上げた。「ふうん、なるほどねえ。おまえも、ずいぶんと苦労してきたらしいね。身の上話のひとつも聞かせとくれ」

三十貫デブの牢名主の声には、一分銀の御利益なのか、なんとなく温かみを感じられた。

ユキは幾分か心を落ち着けて、立て板に水

になりすぎないよう気をつけながら、真実に嘘を振りかけた身の上を語った。

——七年前に、奉公先のお武家屋敷で三男坊と恋仲になつて、部屋住みと貧乏町娘とが一緒になれるはずもなく駆け落ちしたが、身籠つたとわかつて捨てられて。自分も今さら親元へは戻れず。そうこうするうちに子は流れて。いえ、お武家様の名前だけのご勘弁ください。両親にとばちりが行きます。

「ふん、まあいいさ。おまえは客分扱いだ。サキ、ここのしきたりを教えてやんな」

牢内は、奥の中央に十枚の畳が積み重ねられて、そこが牢名主の棧敷。その左右に三枚ずつが年寄。客分は向かつて右の壁沿いに一枚の畳。畳はまだ余るのだが、それは牢名主棧敷の後ろに積まれている。その余つた畳の一枚が、サキと呼ばれた女の隣に敷かれた。そこが、ユキの棧敷だった。

サキは番茶も出鼻どころか、なかなかの煎茶だった。女同士とはいえ、話に花を咲かせ

ようものなら牢番に怒鳴られる以前に牢仲間から睨まれる。にもかかわらず、彼女は饒舌だった。牢名主を含めて他の十八人も、咎め立てない。

というのも、彼女は牢名主の情人いづろだった。そして、彼女も牢名主に可愛がられるのを厭わない。そもそも、奉公先の娘とそういう仲間になって、主人から訴えられての入牢だった。主人の娘に怪しからぬ振る舞いに及んだとして百敲きの替わりに百日の入牢。ところが、タマヨの愛人の座を巡って喧嘩をして相手を傷つけて、五十日を加算されている。

そんなことまであつげらかんと話す娘だから、牢仲間ひとりひとりの身の上やら罪科やからも洗いざらい教えてくれた。

まず、牢名主。関取タマヨの二つ名は入牢してからのものだが、実際に女力士だった。行司が止めるのも聞かず対戦相手を殴り殺したのは、やはり愛人を取り合つての怨恨。鉦山送りは決まったも同然だが、これ以上に牢

名主にふさわしい者はいないということ、すでに一年ちかくも留め置かれている。

二番格は一ノ年寄（牢名主と同様に、非公認の牢内役職）のナミ。間引きを手掛けてきた罪をあばかれて永代牢。牢役人にしてみれば、女牢に産婆（婆あどころか、当人は四十し盛りだが）がいれば、なにかと都合がよい。

新参のユキを数えても二十人の小所帯だから、役持ちは、あとひとりだけ。二ノ年寄のカエデ。三十路に分け入ったばかりの、男好きのする顔立ちと肉置き。押込盗の手引をして、一味ともどもお縄になった。盗んだ額が大きいので全員が死罪になるが、手引の罪は軽いとして罪一等を減じられれば、山送りになるか廓送りになるか、美貌と年齢の綱引きになる。すでに罪を認めているこの女が入牢三月に及ぶのは、詮議が揉めているからだろう。

現代のように裁判所で審理が行なわれるのではなく、下される沙汰が決まってから、御

白州に引き出されるのだ。

その日は何事も無く終わった。

翌日、饅えた臭いのする雑穀混じりの麦飯と漬物と、味噌ではなく塩を溶かしたのかと思うような蜆汁（汁に目玉が二つ映っている）の食事のすぐ後に、産婆のナミが牢から出されたが、これは吟味ではない。月の障りがある女囚は取り調べない決まりになっているので、その言上だった。

吟味部屋へ引つ立てられたのはユキだった。がちりした体躯の、若い牢役人がユキの名を呼ばわって。

「吟味である。出ませい」

牢格子の外で、簡単に手だけを後ろに縛られて、腰縄を曳かれて歩く。着いた先は、衣服検めを受けたときの板の間だった。昨日と同じ二人の脱衣婆が待っていた。

「すまないけど、ちよいと裸になってくれるかい」

一分銀の威力か物柔らかな言い方だったが、有無を言わせぬ響きがあった。

ユキは黙って囚衣を脱いだ。

タマヨほどではないが体躯のがっしりした脱衣婆が、半幅（約十八センチ）の晒し布をユキの肩に掛けた。前に長く垂らして股間を包み、絞って尻の谷間を通して後ろへ引き上げる。腰をぐるっと巻いて、斜めに立ち上がっている部分に絡めて、反対側へ引き絞りに余った布端は腰を巻く布にねじ込んでいく。肩に掛けた布も同じように股間を包んで、これは腰を巻かず、反対側へねじり着ける。

ユキは羞ずかしがりもせず脱衣婆に身を委ねていた。勘解由の戯れで自身も六尺褌を締めさせられたことがある。それはさておいても、枕探しをするような阿婆擦れ女なら平然としていなくては不自然だと考えたのだ。

勘解由の褌を締めたときは布が一尺ほども余ったが、これはびつたり長さだった。してみると、鯨尺ではなく曲尺なのだろう（鯨

尺の六尺は二二五センチ、曲尺は一八二センチ)。

褌を締め終ると、牢役人がユキの素肌に縄を掛けていった。

「あの……着物は？」

「吟味が終われば着替えさせてやる。それが決まりだ」

「助平めが……」

ユキは阿婆擦れ女にふさわしい悪態を吐いたが、取り立てて文句は言わなかった。内心では、吟味法度を強引に捻じ曲げたしたたかさに呆れている。

女囚ノ吟味ニ際シテハ(略)

六尺褌ヲ着用セシムルベシ

囚衣を着せろとは、確かに書かれていない。

縄の掛け方も昨日とは違っていた。勘解由と同じように、いやもつと厳しく、胸の上下を縛られて乳房を縊り出された。

縛った手は勘解由でないにもかかわらず、腰の奥がかすかに疼いた。これからまさに犯

されるのだと覚悟を決めると、胸も切なくなってきた。

引っ立てられた吟味部屋には、もう一人の牢役人と二人の下人が待っていた。こちらの牢役人は勘解由よりすこし若くて、四十前くらいか。瘦身長軀。ユキがそういう目で見ると、脂ぎった顔つきだった。下人はどちらでも、もつと年を食っている。六尺褌を締め、袖無しの半纏を着ているだけ。

「そこに座れ」

年配の役人が、細い筥で土間を示した。

筥は勘解由から聞かされていた物とは形状が異なっていた。牢問に使う筥は物干し竿ほどの太さの竹を細工した物のはずだが、牢役人が手にしている筥は、ずっと細くて、全体に籐が巻きつけられている。女の身ではユキにそこまでの知識は無かったが、それは乗馬筥だった。

「おまえ、枕探しはずいぶんと手慣れてるそうだな。これが初めてではないな」

そら来た——ユキは下腹にぐつと力を入れた。これだけは、絶対に認めてはならない。今回の盗みは三両二分でも、何回も繰り返したとなれば当然十両を超える。問答無用で死罪になる。死罪になる女は色の餌食にならないのだから、囀の役を果たせない。

もつとも。シラを切り通さねばならない問いを投げつけて、それを口実に牢問を厳しくしていき——最後には座禅転がしに掛けるつもりなのか、ただお役目熱心なのか、そこまではユキにわからない。

「ほんとうに、これが初めてなんです」

「白状しないと痛い目を見るぞ」

「信じてください。わたし、お武家様に奉公してたことがあるんです。その人が、あの繩梯子を使っているのを見て……あ」

最後の声は、首繩から長く伸びている端を下人に引っ張られたからだだった。ぐううつと、ユキの上半身が前へ折られる。

ひゅんっ、ビシ！

肩に鋭い痛みが奔った。

「ひいひい……」

ユキは細い悲鳴をあげた。勘解由に尻を敲かれるのとはまるきり違う、純粹の痛みだった。

ひゅんっ、ビシ！

ひゅんっ、ビシ！

左右の肩を交互に十発ほども敲かれた。

「見よう見真似で、あんな軽業ができるか」

「だから、何度も稽古したんですよう」

眠り薬を使ったとまでは露見していない。

のも道理。富島が残った酒を捨てている。

「押し問答をしても始まらないな。起こせ」

下人は首を前へ引つ張っている縄から手をはなすと、ユキの髪をつかんで、大根でも引っこ抜くように立ち上がらせた。

「い、痛い……言ってくれれば自分で立ちます」

ユキの文句には誰も答えない。下人は後ろからユキの両肩をつかんで、身動きできなく

した。

「肩を敲かれたくらいでは、どうということもなからう。叩いているこつちも退屈だ」

牢役人が正面から、笞の先でユキの乳首をつついた——だけでなく、乳房に埋まるまで押し込んだ。

「ここを敲けば、すこしは違った音色になるかな。ん？」

笞が引かれても、押し込まれた乳首は恐怖に縮こまって、すぐには頭を出さない。

笞の先が、反対側の乳首に移った。

「きゃあ！」

いきなりピシッと弾かれて、肩を敲かれたときの何倍も大きな悲鳴をあげるユキ。

「白状したくなったら、遠慮するなよ」

牢役人が二歩下がって笞を腰に差した刀のように構えた。

「ぬん！」ピシイッ！

「ひゃぎゃあああっ！」

気合声と笞が風を斬る音とがひとつになっ

て、一瞬遅れてユキの絶叫が吟味部屋にあふれた。

ユキの右の乳房に、浅く斬り上げた真紅の筋が刻まれている。

「ああああ……」

牢役人がふたたび抜き打ちの構えをとるのを見て、ユキが唇をわななかせる。

「ぬん！」ビシイッ！

「ひやぎや……」

牢役人が笞を回すようにして、逆手で斬り上げる。

「むっ！」ビシイン

「あああああつ！」

悲鳴とともに、乳房がひしゃげてふるると爆ぜた。

右の乳房に二本の赤い斜めの筋、左には一本。綺麗な「へ」の字を描いている。

「あまり強情を張ると、乳が三枚にも五枚にもおろされてしまうぞ」

ぴたぴたと乳首を叩いて脅しをかける役人。

答打ちは肩に限ると法度で定められているのを、雪江は知っている。しかし、出来心で枕探しに手を染めた町娘のユキは吟味法度があることすらろくに知らないのだから、それを指弾できない。

「しかし、これだけのたわわな乳を潰すのも惜しい。代わりに、こちらを敲いてやろう」

答の先がユキの肌を引っ搔いて下がり、禪のまん中をつついた。

「脚を開け」

ユキはふるふるとかぶりを振った。

「堪忍してください。ほんとうに、あんなことをしたのは初めてなんです」

「吊るせ」

ユキが立たされている真上には大きな滑車から太い縄が垂れている。それを首縄に通して引っ張ると、下人が手をはなしてもユキは動けなくなった。

下人がユキの左右の足首に縄を巻いて、二手に分かれて縄を引っ張る。

「ああ、あ……」

ユキの身体が「人」の字形になる。

その正面に、年配の役人が片膝を突いた。

「それは、ちとかわいそうかと」

若いほうが声を掛けると、年配の役人が立ち上がった。

「ふむ。それもそうか」

左手で腰に携えていた笞を右手に持ち替えて、だらんと垂らした。

「斬り上げるのは勘弁して、敲くだけにしてやる。どうせ、これしきでは白状せぬだろうがな」

笞の先で股間をびたびたと叩いて、ユキの顔を恐怖に引き攣らせる。

「いくぞ。覚悟せいよ」

ゆっくりと笞を後ろへ引いて。気合声は発さず、無雑作に真上へ振り抜いた。

ピシッ！

「きやあ……！」

ユキの悲鳴は、乳房を「斬られた」ときよ

り、ずっと小さかった。

手加減せずとも、笞を刀のように扱うのと、ただ振り上げるのでは、まるきり威力が違う。そして。わずか二枚の薄い布であっても、そこは護られている。

それは役人も承知していて。

ピシッ！

「痛い！」

ピシッ！

「もう、赦してください」

ピシッ！

「ひいひい……！」

立て続けに五発を打ち込んだ。そして、わざとらしく笞を投げ捨てた。

「しぶといやつめ。石を抱かせてくれるわ」

ユキは短い柱の前に置かれた座布団ほどの大きさの板の上に座らされた。板には三角形の木材が横向きに並べられている。

「くうう……痛い」

木材の角が脛に食い込む痛さに、ユキが呻

く。背筋を伸ばして上体を柱に縛りつけられると、身体の重みが足の甲にも掛かって、わずかに痛みが軽減する。が、それは束の間。

下人が二人掛かりで石の板をユキの腿に乗せた。

「ぎひいい……！」

石は長さが二尺半、幅が八寸（約七十五センチ×二十四センチ）、重さは八貫（約三十キログラム）。目に見えて、三角の木材がいつそう深く脛に食い込んだ。

「まだ吐かぬか」

年配の役人が石に片足を乗せて揺すった。

「ぎひいいい……お、お赦してください」

ユキの裸身が脂汗にまみれる。

横に積まれている石板は、同じ大きさの物があと三枚。ひとまわり大きな石板も四枚あるが、これは男に対して使われる。しかし、女囚用の物でも、四枚全部を積まれるとユキの身体の重さの三倍にちかい。

それぐらいで脛の骨が折れたりはないが、

数日は歩けぬほど深い傷を負うことも、雪江は知っている。

勘解由は、牢で行なわれる責め問のすべてを雪江に教えていた。脅かすためでも翻意をうながすためでもない。事前の知識があれば覚悟も定まるし、違法な責めの見分けもつく。

そろばん
十露盤に乗せられて、たった一枚の石を抱かされるだけでも、ユキには筆舌に尽くしがたい拷問に思える。四枚では悶絶するに違いない。

しかし、これは牢問といって、すこし強情な科人には日常茶飯に行なわれている責め問でしかない。ほんとうに苛酷な拷問は牢奉行の裁可を要するため、滅多に行われることはない。

そのような本格的な拷問でなくとも、石が四枚まで増やされなくとも、役人の求めるがままに虚偽の自白をしないでいるためには、ありったけの気力が必要だった。

小半時ほども一枚の石で放置されて。

「ええい、強情にもほどがあるわ。この阿婆
擦れめが！」

いかにも忌々しそうに吐き捨てて、年配の
役人は石抱きの中止を下人に命じた。

白状せぬかぎり必ず四枚まで乗せられると
聞かされていた雪江は、もちろん安堵はした
が、拍子抜けする思いでもあった。役人がな
にを考えているか、まったくわからない。

つぎに、ユキは胡坐を組んだ形に縛られた。

いよいよ座禅転がしかと期待(?)したが、
違った。はるかに深く、腿で乳房が押し潰さ
れるまで身体を曲げられた。海老責めとはい
うが、本物の海老でもこんなには身体を曲げ
られないだろう。それを人間がされるのだか
ら、苦痛は著しい。

ぎしぎしと身体が軋み、背骨がへし折れる
かと思う。腰も割れるように痛いし、息を吸
うのもままならない。このまま半日も放置さ
れると血脈が滞って死んでしまうと勘解由か
ら聞かされていたが、けっして誇張ではない

と実感するユキだった。

しかし、この責めも半時で終わった。

「まったく強情なやつめ。明日は、これくらいで済むと思うなよ」

もつと強くたくさん敲き、石の数を増やし、海老責めもぎりぎりまで続ける——という意味には、雪江は受け取らなかった。

牢へ戻されて。吟味の様子を問われて、ありのままに語ったところ——女たちは複雑な表情でうなずき合った。

「楽な吟味でよかったじゃねえか。明日は、もつと楽になれるぜ」

ユキは、牢名主の言葉の意味がわからないふりをした。

「あれで楽というのは、皮肉ですか。明日は、もつとひどい目に遭わされるんですね」

「そうじゃねえよ。おまえをからかつて、何の得があるんだい」

牢名主は、雪江はすでに知っている吟味の

手順を教えてください。

責め問は、ふつう一日にひとつしか行わない。何回か笞打ちに掛けて、これでは白状しないと見極めをつけてから、石抱きにうつる。小半時も様子を見て石の枚数を増やしていくから、四枚を乗せるまでに一時半。その後半時から一時は様子を見るから、強情を張り通せば二時を超える責め問になる。海老責めは石抱きを何度も繰り返してからという段取りになる。

それを半日も掛けずに、ごく軽く短時間でひと通り片付けてしまったのは——ユキを「活き」の良いままにしておくということだ。あの二人の牢同心は、半死半生の女を抱いても面白くないという、まともな神経くらいは持ち合わせているらしい。

「生娘ならともかく、おまえくらいになりやあ、明日からは天国つてもんさ」

「あたしや、天国より娑婆がいいんだけどね

……やっし 奴女郎じゃあなあ」

平囚人のハナが、ぼやきながら顔は笑っている。

「昨日までは、ハナがお人形だったんだよ」
サキが小声で教えてくれた。さる商人の目掛になる約束で支度金をもらって、そのままドロン。お目見え詐欺を働いて捕まった。裁かれれば廓送りになること必定だが、爪書が町奉行所へ送られず、このひと月ばかり、玩具にされていたという。この話で、実際に女囚を犯しているのは、女囚吟味を担当する役人だけだとわかったのが、雪江にとって最大の収穫だった。

「サキさんは？ ハナさんには申し訳ないけど、サキさんのほうが美人だし若いし」

「俺が本気になったら、牢役人の一人や二人、殴り殺すくらい造作もねえ」

関取タマヨが物騒なことを言った。

天国か——ユキは、それが半分は皮肉としても半分は正しいのではないかと思う。飯は最悪だが飢え死にはしない。好き勝手に出歩

けないが、それは奉公していても似たようなものだ。悪役人に犯されるのは面白くないが、ありていにいって「面白くない」で済む話だ。

女のほうから男を誘うのは破廉恥極まりないが、生娘でさえも、好きな男の誘いを待ち焦がれる（者が多い）のだから——操がどうこうは武家の言うことであって、町娘には縁の薄い観念だった。

そういう問題ではない。と、雪江は思い直した。役人の立場を悪用して、女囚を好き勝手に弄ぶ、そのことが許されざることなのだ。

養父の目掛になって六年。性感を開発され変態的な仕種を教え込まれながら、雪江の貞操観念——が言い過ぎなら、一途の想いはむしろ堅固になっている。

一夜が明けて。

午前中に平囚人のモヨとサクラが吟味を受けた。ユキの前日に入牢したサクラは無銭飲食の常習者で、それは素直に認めて一時もし

ないうちに牢へ戻された。モヨのほうは、昼前に戸板に乗せられて半死半生で帰ってきた。子殺しとされているが、本人は頑として否定している。今日は二回目の石抱きだった。

牢内の身分関係は、入牢の後先もあるが、罪の重さ（と、蔓の多寡）で決まる。罪が重ければ重いほど偉いというわけだ。タマヨは故意の人殺しに加えて男まさりの腕っぷしだから、文句無し。

同じ子殺しでもナミが年寄筆頭なのにモヨは平囚人の末席。ユキも女だから、その差を当然と知っている。赤子は「おぎやあ」と生まれて人になる。だからナミは人を殺していないばかりか、産むに産めない事情を抱えた女を何人も救っている。罪は重いが悪人ではない。しかし、我が子を殺した女に同情の余地は無かった。

囚人に昼の食事は与えられない。

役人どもが弁当を使って、ひと休みして。

それから、ユキの吟味が始まった。引つ立てに來たのは、昨日と同じ若い役人だった。

「今日は、下の手入れをしとこうかね」

板の間に仰臥しろと、脱衣婆が言う。ユキはさすがに羞ずかしさを覺えたが——仕方のないことと諦めた。

枕探しの芝居をする前はばたばたして、最後に剃ったのは五日前。禪を締めると毛先が布目に引っ掛かってチクチクする。今日あたり布を突き抜けるのではないか。

陰毛が見エタル時ハ禪ヲ締直ベシ

締め直しても隠れないのだから、事前に剃っておくしかない。

脱衣婆は、ユキが自分でするよりもよほど入念に、淫毛を剃り落とし、肛門のまわりまで指先でなぞって確かめた。

「もひとつ、しとかなきゃならないことがあってね」

脱衣婆に呼ばれて部屋へはいつてきたのはナミだった。

「あたしらでも出来なくはないけど、せつかく本職がいるんだからね」

ナミの本職は産婆である。いったいなにをするつもりかと、ユキは訝しんだ。が、言われるままに脚を開いて膝を立てた。

「こいつを、あんたの子袋に挿れとくのさ」

ナミが小さな鈴を見せた。差し渡しは五分（十五ミリ）ほど。竹筒に糸を通して、その先に鈴をつけた。

女淫を覗き込んで子袋に通じる穴の位置を確かめてから、ナミが鈴を挿入した。

「ちよいとだけ痛いよ」

ぐううつと女淫の中程が押し上げられるような感触があつて。

「痛い……」

鈍い痛みは、すぐに治まった。

引き抜かれた竹筒の先に、鈴は無かった。

「立って、ケンケンをしてごらん」

シヤランシヤランと腹の奥で鳴る鈴の音が

聞こえた。

「その鈴は二重になつてるのさ。握り締めて振つても音が鳴る。凝った細工だろ。ひとつで一分も暴利やがる」

「なぜ、こんなことを？」

「子袋の中に先客が居座つてりやあ、赤子が居付けないだろさ」

「……？」

言われてみると、そうかなとも思う。しかし——これから自分の身に、赤子が居付くかもしれない何事かが起きるのだと、雪江は悟つた。いよいよ——と、気を引き締めたのだが、ユキとしては悟つてはいけないのだ。

「どういう意味です？ それにわたし、石女うまずめになんか、なりたくないです」

ナミが小狡そうに笑つた。

「意味は、すぐにわかるさね。鈴は、わっしでなくても産婆に頼めば、子を掻き出すのと同じようにして取り出してもらえるさね」

ナミは自分の役目を終えると、さつさとひとり引き揚げて行つた。たとえ一間でも牢

格子の外を歩くときは縄を掛けて役人が引つ立てるといふ仕来りの埒外——つまりは、闇の仕事というわけだ。ナミが終始機嫌よくしていたのは、なにがしかのご褒美にあずかれるからだろう。

「それじゃ、禪の番だよ。ちよいと変わった締め方だけど、つべこべ言いつこ無し」

脱衣婆が六尺布を持ってユキの後ろに立つた。

六尺布がユキの身体に巻かれて。釘を差されていても、黙ってはいられなかった。

「なんです、これ。冗談にもほどがあります」
六尺布は、禪の役目をまったくはたしていなかった。股間を包むはずの布は最初から細くよじられて、鼠蹊部を通されたのだ。正面から見ると「八」の字を引っくり返したようになつて、淫裂がまるきり隠れていない。

脱衣婆は黙って役人に場所をゆずった。

「こんなの、禪とは言いませんよ。どこまで辱めれば気が済むんですか」

素直に手を後ろに回しながらも、ユキは役人にも文句を言った。

役人が鼻で嗤う。

「半幅の晒しを腰に巻いて股を通しておる。禪でなければなんだ」

「ど助平め」

今日は、はっきりと大声で言つてやった。

「可愛げのない女だな。そう言えば、昨日も涙ひとつ見せなんだな」

役人は裸身を緊縛し終えた後に、さらに縄を足して首を縛った。

「く……………」

息が詰まって、下腹にうんと力を入れなければ呼吸できない。これが、役人を侮辱した罰ということだろう。

ユキは首を扼した縄の端を引かれて、吟味部屋へ引っ立てられた。息苦しさに立ち止まると、「肌ニ触ルル」どころか乳首をつまんで引っ張られた。吟味法度は吟味部屋の外では適用されないものらしい。

「ほう、柴沼にしては趣向を凝らしたものだ
な」

長身瘦躯の牢役人が若い同役をからかった
のか褒めたのか。

「太田殿には及びません。こやつ、拙者をど
助平だと決めつけましたので、残虐非道でも
あると教えてやっているとところです」

「なるほど。では、拙者は冷酷無慈悲だと教
えてやることにしよう」

ユキは顔色ひとつ変えない。言葉で嘲られ
るのは慣れている。

梯子が持ち出されて、壁に斜めに立てかけ
られた。そこに、いったん縄を解かれたユキ
が「人」の字形に縛りつけられた。鼠蹊部を
禪の布に圧迫されたうえに開脚させられたも
のだから、淫裂がぱっくり開いて、貝の足の
裏側まで曝される。

太田と呼ばれた瘦身長躯の役人が、昨日と
同じ細い笞を手にした。

「昨日は布越しだったからたいして堪えなか

ったようだが、今日はどうかな」

　答の先で淫核をつつく。

「お、お赦してください……」

ユキの声は震えていた。時折は勘解由にそこを洗濯挟みで虐められることもある。先日は皮を剥かれて尻糸で括られさえした。指で弾かれて泣いたこともある。しかし、答で敲かれたことなど無い。指で弾かれるより万倍は痛いだろうと想像すると、背筋を氷の針が貫く。

「枕探しは何度もしてきたと白状するなら、考えてやらんでもないがな」

淫核に答を打ち込まれるのだけは、なんとかしてでも避けたい。けれど、認めてしまえば……どうなるのだろう、疑念が湧いた。

勘解由の推測だと、死罪になる女には自暴自棄の道連れを恐れて手を出さない。ハナよりも男好きのする自分（くらいには自惚れている）を、こいつらは死罪に追い込むだろうか。

「へたに歌ったりしちやあ、三尺高いところへ
磔けられるじゃないですか」

時間稼ぎを兼ねて、相手の出方をうかがった。

「なるほど。やってはいるが、白状はしたくないというわけだな」

太田が答を振りかぶった。

ひゅんっ、バツチイン！

「ぎやがあああああっ！」

股間がまっふたつに切り裂かれたような激痛が爆発して、目の前を稲妻が飛び交った。

ユキは手足を突っ張って吠えた。

ひゅんっ、バツチイン！ バツチイン！

「ぎやあああっ……ひいいい！ や、やめ……

お願い……」

答は淫核を敲くだけでなく、そのまま淫裂まで深くえぐって下へ突き抜ける。

ユキは後悔していた。なんだって、こんな馬鹿な役目を引き受けてしまったのだろう。

拷問を受ける場面を想像して腰の奥を疼かせ

ていたなんて——自分の能天気さ加減に愛想を尽かしていた。

「さっさと白状してしまえ。白状すれば楽にさせてやる。どうせ、牢名主からあらかたは聞いておるのだろう？」

これは——犯される覚悟はついておる筈ではないかという謎掛けだろうか。死罪になる女はどうこうというのは勘解由の推測にしか過ぎない。

ひゅんっ、バッチイン！　バッチイン！

「ぎいっ……でも、死罪は厭ですう」

「ならば、生き地獄を味わわせてやる」

若い柴沼が、壁に掛けてある縄束をほどこいから四本に折った。

梯子の横に立って、縄束を振りかぶる。

ひゅんっ、バッチイン！

筈が淫裂を切り裂くと同時に、縄も打ち下ろされる。

ぶゆん……バチャチャン！

「がはああっ……！」

重たい激痛が乳房を満たして息を詰まらせる。

ひゅんっ、ぶゆん……

バッチイン！ バヂヤヂャン！

乳房だけでなく、胸から腹までが赤く腫れていく。淫核は皮を咬み破られて、血に染まる。

続けざまに十発ほども敲かれて。

「がはっ……」

悲鳴が立ち消えて、ユキの全身から力が抜けた。

「しぶといやつだ」

「こやつ、まさかほんとうに盗みは初めてなのでは？」

「まさかな。しかし、今となっては意馬心猿というやつじゃ」

「それは、まあ。爪書さえ取ってしまえば、生殺与奪の権を握るわけですから——ずいぶんと面白いことができます。どうでしょう。

こやつには、辱めを与えるより尋常の牢問の

ほうが適しているのでは？」

「ふうむ」

勘解由は、雪江に枕探しをさせる相手を手駒からは選ばなかった。偽りはどこかで綻ぶ懸念がある。しかし、行きずりの男を相手に、まったくの素人が財布を盗むのは難しい。よしんば成功しても、男が情にほだされて、財布を自分から与えたなどと言い出せば元も子もない。だから確実に悪辣な手段を工夫したのだが、そのせいで牢同心にユキは本格の女賊だと思込まれてしまった。

死罪が確実になるような爪書を取って、口を閉ざしているなら握り潰してやると持ちかければ——ただ犯すだけでなく「ずいぶんと面白いこと」をしてのけられるなどと悪心に邪心を重ねさせる結果となってしまうのだった。

勘解由と富島の誤算だった。